

幼児期の音楽表現に於ける「音楽アウトリーチ」の課題

若原 真由子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

音楽におけるアウトリーチの手法は多岐にわたり、近年では研究が盛んにおこなわれている。そのほとんどの研究は訪問演奏によるものである。また、特に小学校や中学校での訪問演奏を対象とした研究が主である。幼稚園など就学前施設においても積極的な音楽アウトリーチの導入がされることが理想である。本稿では音楽におけるアウトリーチについて最近の研究の動向をまとめることにより、今後の研究に活かしたいと考える。

【キーワード】 幼児, 音楽表現, 領域「表現」, 音楽アウトリーチ

I. はじめに

筆者はこれまで、福祉施設や教育機関で訪問演奏を行ってきた。教育的要素を取り入れた訪問演奏は、解釈により捉え方は様々だが、音楽におけるアウトリーチ（以下、「音楽アウトリーチ」とする）と言われている。音楽アウトリーチの特徴を要約すれば、演奏家自らが聴き手のもとに出向いて行って演奏を行うと定義づけることができる。音楽アウトリーチを保育現場に導入することで、より充実した幼児の音楽表現につなげることが可能であることが考えられる。

近年、音楽アウトリーチの手法は多様化され、種々の角度から光が当てられた研究がされるようになってきた。本稿では、幼児を対象とした音楽アウトリーチについてまとめ、今後の研究の課題を見出したい。

II. 音楽アウトリーチとは

音楽アウトリーチとは「芸術普及活動」や「教育普及活動」として認識されている¹⁾。もともと福祉の業界で使われていた「アウトリーチ」の手法を音楽にも適用された。「アウトリーチ」は「手を伸ばす」という意味があり、音楽家自ら足を運び、主に音楽になじみのない方にアプローチするという手法である。ここでの「芸術普及活動」とは、地方や病院などで出張演奏を

行う芸術を周知する活動であり、一方の「教育普及活動」とは、教育的要素を導入した、特に学校現場などでの公演や実技指導などを指す。そして近年では、クラシック専用ホールやNPOなどが主導し、プロの奏者たちが音楽アウトリーチに積極的に取り組む傾向が顕著である²⁾。この活動の目的は、芸術を普及することだが、例えばへき地などでは音楽ホールが整備されていないために、そこに住む人々が音楽に興味や関心を持っているにも関わらず、生の音楽に触れることができない環境である。このような地域に奏者自らが出向いていき、演奏環境を問わずに演奏を行うことも音楽アウトリーチのもつ、ひとつの特徴でもあり、意義でもあると言える。また、音楽アウトリーチは必ずしも音楽に関心のある人ばかりを対象にするとは限らない。「芸術普及活動」を趣旨とする取り組みであることから、「潜在的聴衆への働きかけ」という契機的な事項も音楽アウトリーチが果たすべき活動である。

音楽アウトリーチ活動の活動は多岐にわたるが、多くは学校・病院・施設などへ出向いての訪問演奏が挙げられる。近年に於ける音楽アウトリーチの研究対象となる取り組みの多くは、この施設へ出向く「訪問演奏」が中心的なテーマとなっている。訪問演奏は、セミプロともいえる音楽大学や教員養成校で音楽を学ぶ学生にとって、人前で演奏をする機会としても貴重な

経験の場である。学校などの施設側という視点からも、音楽的な知識に支えられ、同時に専門的な教育を受けている演奏者が演奏することは、児童や生徒にとっても、通常行われている授業では得られない高い学習効果が期待できることは十分に考えられるところである。つまり、奏者である「送り手」と、聴衆である「受け手」の双方にとって、音楽アウトリーチの活動が有用であることがわかる。よって、音楽アウトリーチが教育とは切り離すことができない関係性を包含している活動であることがうかがえる。

Ⅲ. 幼児を対象とした音楽アウトリーチ

1. 就学前施設における音楽アウトリーチの意義

幼稚園教育要領の領域「表現」では、以下の記載がある。

ねらい

- (1) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

以上の内容から、幼児期には様々な音楽に触れ、表現することを楽しめるような活動が求められていることがわかる。しかし現況としては、

音楽を専門としない指導者により幼児が音を通して豊かな感性を育む³⁾という環境にある。また、各保育者の音楽的技術格差が、活動内容やレベルに直接影響する⁴⁾とも言われている。このような現状を踏まえた時、音楽アウトリーチの意義が認められる。つまり、演奏を生業とする演奏家が保育に関わることによって、幼児の音楽表現の活動の幅が広がり、活動が充実するであろうことは十分考えられる。

教育機関等で導入される音楽アウトリーチは、それまで教師と子どもの2者関係だったのが、音楽家が入ることで3者関係になり、新たな関係性が生まれる⁵⁾。これは保育にも同じことがいえよう。保育の場合では、保育者と幼児の2者関係に演奏家加わることで、図1のような3者関係になると考えられる。そして近年では、3者の間に「コーディネーター」が加わることで、より音楽家と教員の間で互いに他分野に対しての理解が深まり、結果、教育的効果を上げるに至ることになる。

2. 幼児を対象とした音楽アウトリーチの実践例

幼児を対象とした音楽アウトリーチの実践は多岐にわたる。例えば、「東京文化会館ミュージック・ワークショップ」では、0歳からの参加が可能である。0歳児にできることは当然限られているので、対象年齢によって取り組みが異なることになるが、概ねそこでのプログラムは、音楽に合わせて踊ったり、楽器を演奏するという内容をもつ、いわゆる「参加型」の催しが、音楽アウトリーチの中心として据えられている状況が極めて多く見られる。クラシック音楽では、就学時の入場を不可とする演奏会が多く存在する。これは、演奏に際しては当然静粛な演奏環境を保持することが、奏者と聴衆の双方への配慮であることから、慣習化されているのは、言うまでもない。しかし音楽アウトリーチに於いては、敢えてそのような制約を取り除くことで、音楽の垣根を低くし、それによってこのような演奏会では、親子が気軽に楽しめることが狙いとされる。またその時のプログラムは、乳幼児の発達が勘案されて組まれることから、教育的内容をもつ取り組みが多く見られる。

また、保育施設で行われる音楽アウトリーチの実践報告も多数存在する。この場合は特に先の3者の関係が重要であり、そこでの事前の入

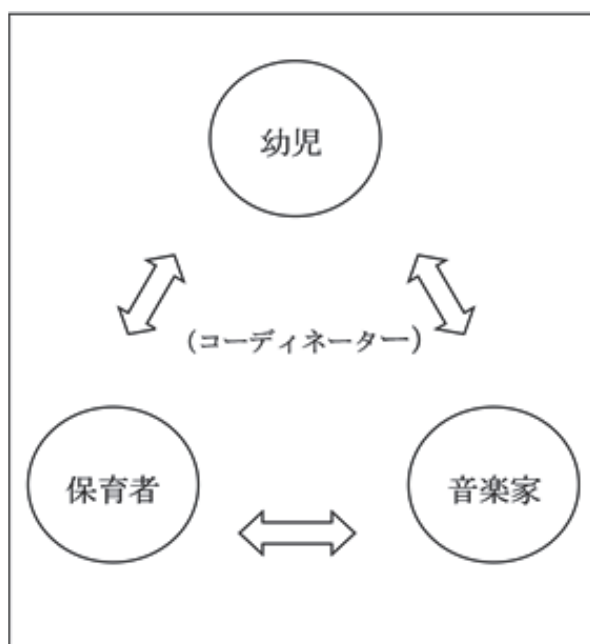


図1. 音楽アウトリーチにおける3者の関係

念な打ち合わせが、音楽アウトリーチの方向性や趣旨を大きく左右する。また、その際のプログラムは、公共ホールで実施されるものと比較して、より教育的なプログラムが多いが、特にワークショップ的な内容が目立つのがひとつの特徴でもある。例えば参加型の例として、園歌を合奏にアレンジしたり、リトミックなどが挙げられる。一方で、幼児の音楽教育で日常的に取り入れられている、その時季に合わせた歌の選曲と実践など、現場での取り組みと結びついた内容が試みられる。保育者との打ち合わせは、このような腹案を具現化する狙いもあり、園児に相応しい内容が考案される。このため、公共ホールで行う音楽アウトリーチよりも、幼児の様子をとらえたうえで行うことを前提とした時、就学前機関での実施が有用であることがわかる。

3. 音楽アウトリーチの今後の課題

音楽アウトリーチの課題として、幼稚園・保育所などの就学前施設に於いての実施数が少ないことが挙げられる。財団法人地域創造の調査によると、文化施設以外で行われた音楽アウトリーチの件数は、小中学校に集中している⁶⁾。前述したように、実施場所を公共ホールとした時には、そこでの対象が幼児であることは珍しくない。しかし、こと就学後の教育機関である小中学校との比較を試みた場合、量的な格差は歴然である。音楽アウトリーチはその性格上、単発的な試みであっては、音楽アウトリーチの本来的あるいは根源的な意味をなさないことにもなりかねない。もちろん回を重ねさえすればよいということではないが、取り組みの累積があって初めてその有意性が具現化する項目があることも、また否めない。これらの点に鑑みた時、就学前の教育機関では、小中学校ほど音楽アウトリーチがまだ十分に定着していないと思われる。

また、音楽アウトリーチは継続した活動が効果的であると言われている⁷⁾。だが、実際に幼稚園では訪問演奏を年に1度のペースでしか希望しないという報告がある⁸⁾ことから、保育施設へのアウトリーチの継続した導入は難しいのが現状である。

IV. まとめ

就学前機関での音楽アウトリーチにおいて、幼児の音楽表現に果たす役割の大きさと可能性は、今後ますます拡大するポテンシャルを秘めていると考えられる。しかし、先述した理由から、音楽アウトリーチが保育現場に定着しているとは言い難い。これは、保育における音楽アウトリーチは詳細なデータや研究がまだ少ないことから、教育的効果がまだ理解されにくいのではないかと考える。そのため、保育者の音楽アウトリーチに対する理解や、保育現場での意識調査が求められるのではないだろうか。そして、実際に幼稚園では訪問演奏を年に1度のペースでしか希望しないとの報告にもあるように、年に1回程度の導入に留まらず、継続した音楽アウトリーチの導入が可能となるような音楽アウトリーチの方法を模索する必要がある⁸⁾。そのようなハードルを取り除いた、保育現場にいわば「気軽に」音楽アウトリーチが導入できるよう、研究を重ねたいと考える。

本稿では、幼児における音楽アウトリーチに関する研究をまとめることにより、保育施設での音楽アウトリーチ導入の課題が見えた。音楽アウトリーチが幼児の音楽表現の充実につながるよう、今後研究を続けていきたい。

【文献】

- 1) 乗松恵美 (2011) 音楽によるアウトリーチ実践報告及びアウトリーチの意義についての考察 — 公共ホール音楽活性化事業 平成23年度 宮城県多賀城市公演 — 広島文化学園大学学芸学部紀要第2巻 pp.99-122
- 2) TAN アウトリーチハンドブック制作委員会 (2007) NPO トリトンアーツネットワーク アウトリーチハンドブック パンセ・ア・ラ・ミュージック
- 3) 山内信子 (2016) 就学前施設の音楽アウトリーチ活動における演奏者と聴衆の相関関係に関する一考察, 聖和短期大学紀要 第1号 pp.59-68
- 4) 長崎結美 (2016) 乳幼児のためのコンサートによる音楽教育の可能性 — 保護者を対象としたアンケート結果から — 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要 (第3号) pp.5-13

- 5) 林睦 (2013) 音楽におけるアウトリーチを考える－基本的な考え方, 歴史的経緯, 最近の傾向－
- 6) 地域創造 (2001) 地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究 平成 12 年度調査報告書アウトリーチ活動のすすめ pp.23
- 7) 地域創造 (2010) 文化・芸術による地域政策に関する調査研究 新アウトリーチのすすめ pp.6
- 8) 萩原恵里・木村文子 (2018) 幼稚園における音楽アウトリーチの可能性 幼年教育 WEB ジャーナル第 1 号 pp.2-12

Challenges of "Music Outreach" in musical expression in young children

Mayuko WAKAHARA

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 Outreach methods in music are diverse, and research has been actively conducted in recent years. Most of the research is done by visiting performances. In addition, research on visiting performances in elementary and junior high schools is mainly conducted. It is ideal to actively introduce music outreach in preschool facilities such as kindergartens. In this paper, we would like to summarize the trend of recent research on outreach in music and make use of it in future research.

【Key words】 Child, Music expression, Area representation, Music outreach